

A Study on the Language of Samuel Johnson:  
With Special Reference to the Language of his Correspondence

サミュエル・ジョンソンの言語に関する一考察：

特に彼の書簡の言語に言及して

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期 人文学専攻

学生番号：D126942

氏名：水野 和穂

本論文は、サミュエル・ジョンソン(1709-1784)の私的書簡の言語について、コーパス言語学の手法を用いて、綴り字、語彙、文法の側面より包括的な記述を試みるものである。ジョンソンのような時代を代表する文人の言語、そして、日常言語に近いと言われる書簡の言語を調査することにより、当時の言語状況の実態を把握できると考える。

第1章では、まず、当時の時代背景を概観する。17世紀の激動の時代の後、いわゆる「長い18世紀」に、英国で生じた政治、社会、文化的な出来事を概観し、18世紀には各分野において、「安定」を好む時代気運が高まった状況を見る。次に、1980年代まで軽視されていた後期近代英語研究が、1990年代以降劇的に進展していることを確認し、これには、コンピュータ技術の革新に伴うコーパス言語学の発展が多分に影響していることを述べ、その産物である英語史コーパスを紹介する。

第2章では、コーパス言語学の手法を用いて、ジョンソンの散文の特徴について量的に考察する。まず、バイバーとフィネガンが開発した「多次元分析」によって、*The Century of Prose Corpus* の分析により、18世紀の作家の中でのジョンソンの位置づけを行なった。その結果、18世紀の英語散文は一樣ではなく、前半と後半では文体に違いがあること、さらに、ジョンソンが活躍した1750年以降、口語的文体から文語的文体への明らかな回帰が判明した。次に、ジョンソンのエッセー及び書簡の言語と、ジョンソンが、「書き言葉のモデル」であると評したジョセフ・アディスンのエッセーを、「多次元分析」により検証した。その結果、ジョンソンの文体はアディスンのものとは異質で、総じて文語的文体がその特徴であるが、同時に、ジャンルに応じて明らかに文体を変えていることが判明した。これは、ジョンソン自身による英語と英語文体についての言説に見られる彼の英語に対する保守的な態度と一致する。

第3章では、ジョンソンの生涯、彼の書簡集についての書誌学的情報、そして、書簡冒頭部の定形表現に注目して、彼の社会的ネットワークを検討する。本研究には、ブルース・レッドフォード編集による *The Letters of Samuel Johnson* (1992-4) を第1次資料として用いた。また、分析用に上記書簡集に収録されている全書簡を電子化した。書簡の期間は、1731年10月30日より、1784年12月10日までの53年間で、総数は約1,500通である。年代とジョンソンの年齢により書簡を整理した結果、1750年以降、特に1770年以降に書簡数が急増する。文通相手としては、ジョンソンの旧友ジョン・テイラーと義理の娘ルーシー・ポーターが、彼と40年以上に渡り交流があった。1760年以降は、一世代年下のヘスター・スレールとジェイムズ・ボスウェルがジョンソンの社会的ネットワークに加わるだけでなく、ジョンソンが送った書簡数において、最終的にそれぞれ第1位と第2位となる。ジョンソン70歳代の1780-84年の期間は、ヘスターの娘であるマリア・スレールや、スレール家の一員ジョン・パーキンスへ書簡が増す。また、「クラブ」の創設に関わったジョシュア・レイノルズとその妹フランシスもジョンソンの社会的ネットワーク加わる。一般に書簡の送り手/受け手の親密度は、書簡冒頭部の定型表現により推測できるが、ジョンソンが用いた定型表現は、ベーカー(1980)が示唆する以上に変化に富んでいた。さらに、ジョンソンが送った書簡の数が多いう文通者に対する冒頭部の定型表現は、ヴァリエーションに富むだけでなく、非形式的な表現も見られた。これは書簡数が相手との親密さに対応していることを示している。

第4章では、ジョンソンの書簡の言語の綴り字について考察する。まず、ゲルラッハ(2001)のコメントと筆者の経験に基づき、*Pen Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE) と *A Representative Corpus of Historical English Resisters* (ARCHER) を用いて、18世紀英語における *shew/show*、*chuse/choose*、および接尾辞 *-ick* を持つ形容詞の状況を調査した。結果は、18世紀には *shew* が主流であったが、19世紀には *show* が主流となり、*choose* は18世紀前半にはすでに一般的であった。また、*-ick* 形容詞については、2つのコーパスではほぼ同様の変化が見られた。

例えば、*publick* は、PPCMBE では、18 世紀前半には一般的で、19 世紀になっても残っていた。一方、ARCHER では、*public* は 18 世紀前半にはすでに一般的であり、19 世紀には消滅する。次に、ジョンソンの書簡の綴り字について、オセルトン (1984) が指摘する「2 重綴り字体系」を参考に、ジョンソン自身編纂の *A Dictionary of the English Language* (1755) に収録されている見出し語の綴りとジョンソンが書簡と *Rambler* で彼が実際に使用した綴りとの相違を考察した。その結果、彼はオセルトンの言う「公的基準」に従っていたわけではなく、綴り字の選択には、3 つの原理が働いていることが判明した：1) 彼の「規則と実践」が一致しているもの、2) 彼の「実践」が「規則」に反しているもの、3) 彼の綴り字選択が不安定であるもの。さらに、18 世紀英語でヴァリエーションが見られる綴り (-ll/-l; -our/-or; final -e) について、また、ジョンソンが *bothe* を *both* と自ら修正した形跡があること、最後に、現代英語では 1 語として綴る複合代名詞・副詞や再帰代名詞の語形のヴァリエーションについても考察し、これらにおいても、ジョンソンは書簡においては、*Rambler* と異なり、彼が単一のルールに従っていないことが明らかとなった。

第 5 章では、ジョンソンの書簡の言語を、語・句の観点より考察する。ジョンソンは、*OED* の用例数において 45 番目に最も引用されており、その数は 5,240 件（全引用件数の約 0.14%）で、初例の引用数は 156、特定の意味の初例の引用数は 585 である。続いて、書簡の語彙特徴を、出現率、キーネス、言語的関与の観点から分析した。出現率では、1 人称代名詞と 2 人称代名詞の頻度が、*Rambler* や PPCMBE、ARCHER と比べて特に高い。次に、*Rambler* の語彙を参考コーパスとして、書簡の特徴語彙をコーパス言語学の「キーネス」の観点より調査した。その結果、書簡の言語は、主観性・関与性を表す 1 人称と 2 人称代名詞や私的動詞などが高頻度であるのに対し、*Rambler* の言語は、著者の客観的・非関与的な態度を反映する 3 人称代名詞や抽象名詞がその特徴であることが分かった。続いて、ティーケン (2014) の枠組みを用い、言語的関与性について検証した。その結果、自我的関与、対人的関与、強調的関与の全ての評価基準において、*Rambler* よりも書簡の方が極めて関与性が高いことが分かった。最後に、*OED* へのジョンソンの貢献について、書簡集より 3 語の新語、26 の新語義を提供していることを確認した後、「ジョンソン流」と称され、特に *Rambler* において極めて特徴的な表現である「名詞化」と「並列表現」について、書簡での使用状況について調査した。その結果、使用率は *Rambler* の 1/2 程度ではあったが、書簡の言語にもいわゆる「ジョンソン流文体」の痕跡が見られた。

第 6 章では、後期近代英語で問題となる文法変化について、ジョンソンの書簡の言語を考察する。後期近代英語期は、長期的構造変化が安定し現在の英語構文の基礎が確立する点で重要である。この章では、1) 文法カテゴリーに関わる大きな変化と、2) 出現頻度レベルでの変化、そして 3) 当時の口語語法について注目する。後期近代英語期の文法カテゴリーに関わる変化とは、「受動進行形」と「get による受動態」である。ジョンソンの書簡および *Rambler* には、「受動進行形」は 0 例、「get による受動態」は 3 例のみであったことから、ジョンソンは革新的な文法構造の使用には保守的であったと言える。出現頻度に関わる文法構造として取り上げたのは、「否定平叙文における助動詞 *do*」、「進行形」、「助動詞 *be* による完了形」、「関係節における後置された前置詞」である。調査の結果、*do* によらない否定構文は、限られた動詞にのみ用いられ、具体的には、*care* (1 例)、*doubt* (20 例)、*fear* (1 例)、*go* (1 例)、*know* (271 例)、*like* (1 例)、*make* (1 例) であった。*Know* に関しては、*do-less* タイプをジョンソンは多用しており、*know not* と *do not know* の分布は書簡集と *Rambler* でほぼ同じであった。進行形の使用については、明らかに *Rambler* よりも、口語的文体で書かれた書簡の言語使用域を好む傾向が判明した。さらに、進行形の年代ごとの分布を見ると、ジョンソンの年齢とともにその頻度が増加することから、当時、進行形は話し言葉において定着しており、ジョンソンは当時の語法に沿ってい

たと言える。自動詞完了構文における *be/have* の選択については、ジョンソンは全般的に *be perfect* 構文 (71.8%) を *have perfect* 構文 (28.8%) よりも好んで用いたが、年代ごとの分布を見ると、進行形と同様、ジョンソンは年齢とともに *have perfect* の割合を増やしている。次に、ジョンソンの後置前置詞に対する扱いは非常に明白で、文・節末に前置詞を置くことはほとんどなく、特に *Rambler* においては、それと対照的な文法構造 (*pied-piping* 構文) を好んで用いた。最後に、口語語法については、ジョンソンが *you was* を使用したのは2例のみであったが、書簡の草稿では見られる *you was* を自ら *you were* に修正しているケースが1例存在していること、また、形容詞を強める単純形副詞を使用していないことから、当時の規範文法家の指摘に対して、ジョンソンは注意を払っていたと考えられる。

本研究では、これまで注目されることが少なかったサミュエル・ジョンソンの書簡の言語に注目しその特徴の記述を試みたが、その結果を従来の彼のエッセーを中心とした言語研究と組み合わせることで、ジョンソンの言語の位置づけをさらに客観的に明らかにすることができた。一方、今後の課題も残っている。例えば、18世紀の半ばで、なぜ文体が大きく変わったのか、第2章で検討した17人の作家のうち、エドマンド・バークの言語は18世紀後半の文体の傾向から逸脱しているが、その理由の考察にまで及んでいない。ジョンソンの言語については、彼が目指した文体や同時代またそれ以降の作家に与えた影響などの探究も今後の研究課題である。